

## 第6学年 国語科の実践

1. 単元名 意見文を書こう 教材名「本物の森で未来を守る」 (全 8時間 本時5時間目)

2. 単元目標

- ・筆者の提案を理解し、吟味して考えを深めることができる。筆者の提案に対して考えを交流し、話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる。
- ・筆者の提案に対し、事実と感想、意見などを区別すると共に、適切に資料を引用したり、表現の効果などについても工夫して意見文を書く。

3. ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題…子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成  
手立て…子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり  
ブロックテーマ 「仲間への理解、自立する自分」  
・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切にする姿 ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

### 〈聴く・話すについての指導〉

6年間の積み重ねが児童たちに身につけており、4月のころから温かい雰囲気でも聞いたり、話したりすることができている。しかし、学習内容が難しくなった分、聞き手として話を理解するのに困難な場合が多い。そのため、人の話を聞き、その内容を理解したか全員で確認する時間を設けている。

話し手としても、難しい内容をどう相手に分かりやすく説明するかが重要である。どの言葉を使えばよいのか、どのような順序立てで相手に伝えればよいのか常に考えながら話ができるようにしている。

聞き手としては「よく話を聞き、分からないことを分からないままにしないこと」を合い言葉にしている。諦めず、聞き直したり、質問したりして「聞く」から「聴く」に変容していきたい。

話し手としては「相手意識を常に持ち、分かってもらおうと努力することが相手にとっても、自分にとっても良いこと」を合い言葉にしている。国語力はもちろん、具体例を挙げて話す、生活経験と結びつけて話す、絵や図などを用いて話すなど、より相手に伝わる話し方の技を習得していけるよう支援していきたい。

### 〈これまでの関わり合い・ひびき合い〉

代表委員会の議題、クラスイベント、総合的な学習の時間の活動内容などについては、活発な話し合いがなされた。多くの友だちが話をしている中、考えを話していない友だちがいると「〇〇さんは？」などと自然に児童同士で意見を求める場面も見られる。自分の生活に関係する事柄や、興味がある話題、全員の考えが反映されなければいけないと児童たちが考えるものに対しては、意欲的に話し合い、相手の話を聞き自分の考えを深めることができる。学習の場面においては、反対・賛成などの意見が分かれるような問題や、正解が誰も分からないような問題に対して、意欲的に相手の話を聞こうとし、自分の考えを深めようとする事ができる。

話し合いの中では、自分と違った意見を受け入れられなかったり、自分の凝り固まった考えから逸脱できなかったりすることもある。自分の考えも大切にしながら、相手の意見も大切に「折り合い」をつけながら自分の考えを再構築できるようになってほしいと考え、声をかけている。

4. 単元と指導

### 〈単元について〉

東日本大震災をはじめ、最近では熊本県や鳥取県でも大きな地震が起こり「次は小田原に大きな地震が…」という危機感や、海に近い地域に住んでいることもあり「津波対策が果たして万全なのだろうか」と不安感も抱いている状況である。そのため子どもたちは、総合的な学習の時間に「小田原の防災 地震・津波から身を守る」をテーマとし、現在活動をしている。

そんな中、本単元で扱う資料「本物の森で未来を守る」で筆者は「本物の森」(その土地に昔から分布している木々)の防災効果を生かした「森の防波堤」を造る活動を推進していこうと提案している。防災について調べている児童たちにとっては、大変関心の高い資料であり、深く読み込もうとするだろう。そして、今まで人工的な津波対策しか考えてきていなかった児童にとって、この資料との出会いは大きな価値となり、防災対策において視野が大きく広がっていくであろう。

そして資料を読み取り、筆者の提案を理解する。その上で「自分たちの住んでいる小田原ではこの提案は生かせるだろうか」という疑問を投げかける。「自分の命や小田原の町を守りたい」と考えている児童にとって、解決したいと思える疑問になると考えている。この疑問に対して、自分の考えを明確にしていく。考えの根拠には、資料の文章から読み取ったことをはじめ、メディアや防災対策課の方の話なども参考にし、必要な情報を取捨選択し、根拠に厚みをもたせていきたい。自分のメモやノートの内容を比較、対照したり、関連のあることをまとめたり、分類したりして、自分の考えに生かしたりし、自分の考えを根拠付けて、説得力を持たせる力を養っていきたく考える。

そして、話し合いの場では自分の意見が説得力を持つように、自分の立場を明確に説明したり、概説したりする力を伸ばしていく。それと共に、話の意図は何か、自分に伝えたいことはなにか、共に考えたいことは何か、など相手の話の内容を十分に聞き取る。そして自分の考えと比べ、共通点や相違点、関連して考えたことなどを整理して、自分の考えを再構築する力を伸ばしていきたい。そのような過程を通し、筆者が紹介している活動に対して、メリット・デメリットを明らかにし、「小田原に生かせるか」について自分たちなりの答えを見つけていってほしい。

最後に、話し合ったことをもとに、意見文としてまとめる際は、自分の考えを明確に表現するための構成を考え、相手が書き手の考えを明確に理解できるような文章が書けるようにしていきたい。このような力を育てるために、この資料と出会うことは、大きな価値があると考えている。

#### 〈指導について〉

防災対策課の方から小田原の津波対策について「防波堤がある」「テトラポットが海に沈んでいる」「避難ビルがある」「地形的に大きな波が来ない」などの話を児童は聞いている。しかし、完全に津波から町を守るのではなく、いかに減災できるかが重要であることを学んだ。そして、「津波対策について一緒に考えていってほしい」と投げかけられる場面もあった。

そんな児童たちに、この資料を提示する。この資料では、「本物の森が備える自然災害に対する力強さ」「本物の森が生活圏に0.06%しかなく災害に耐えることができる土地はほとんどない」「東日本大震災では、人工の建造物が多く破壊された」「震災後、土地本来の小樹林は生き残ったこと」「森の長城プロジェクトでは、震災で発生した瓦礫を再利用し、根を深くはりめぐらせることができる」「土地本来の木なら管理の必要がない」「森の長城が完成すると、津波が来ても、そのエネルギーを減少させ多くの人々の命や復興に必要な財産を守ることができる」「森は20年の年月をかけ、完成する」などの事を読み取ることができる。読み取りを丁寧にを行い、全員が内容を理解できるようきめ細かい支援を行う。そして、前述したように本時で問題となるのは「このプロジェクトは小田原でも生かせるのか、どうか」である。

資料を丁寧に読み取っていれば、根拠を資料から探し自分の考えを明らかにしていけるだろう。また、児童の実態に応じ、インターネット上に掲載されている森の長城プロジェクトに関する情報を調べる時間をとるか、情報を教師が提示する。そうすることにより、根拠に厚みが生まれ、この活動についてより考えを深めることができるだろう。

そしてこの問題に対し、自分の考えを交流していく。「小田原でも生かしたい・生かせる」と思う児童も多いだろう。しかし、いざ自分の町でこの活動が生かせるかどうかとなると話は違ってくると思う児童もいるだろう。まず、海岸沿いを歩いて津波対策を探しに行ったときの経験から木々を植える場所がないことや、20年もの歳月を費やすこと、早急な対策でないといつ大地震がくるか分からない、人工的な技術も進歩していて防災対策課の人も日々対策を講じている、などの考えが導き出されるだろう。

また、森の長城プロジェクトはやれる場所があれば行い、人工的な対策も進めていくという考えも意見として出されるだろう。この、両方の考えを取り入れた考えに注目させる言葉がけを教師が意図的にする。「生かせる」「生かせない」という二者択一の考え方ではなく、小田原の町を守るために様々な対策が必要であるという考え方を構築していくことができるだろう。一人ひとりがしっかりと自分の意見を持つことができるよう時間を十分にとると同時に個別に声をかけていく。そして、人の話を聞き、異なった角度からの意見と出会う。自分と異なった意見でも、受け止め、互いの意見から、よりよい考え方を見いだしていく。そうした姿をひびき合いの姿としたい。

5. 単元構想 6年 国語 「本物の森」で未来を守る

- ・筆者の提案を理解し、吟味して考えを深めることができる。筆者の提案に対して考えを交流し、話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめることができる。
- ・筆者の提案に対し、事実と感想、意見などを区別すると共に、適切に資料を引用したり、表現の効果などについても工夫して意見文を書くことができる。

総合 テーマ 小田原の防災

小田原の防災、特に地震津波から身を守れるようにしたい！総合で学んだことを家族・地域の人にも教えて命を守りたい！

今までやってきた活動内容

- 「小田原市民に聞きます 小田原で最も対策すべき災害は」インタビュー
- パソコンや本での調べ学習
- ハザードマップを見ながら、自分の家の周りの危険度を調べよう。
- ハザードマップを見ながら海沿いを歩いてみよう。

「津波対策が見当たらない…」  
「どうして。」「怖い！」「大丈夫なの？」

防災対策課の方に話を聞こう

- ・テトラポットの使われ方
- ・西湘バイパスが防波堤がわり
- ・防波扉 人によって閉められる
- ・無防備な部分が多い。
- ・お堀に津波の水を吸収させる
- ・地形的に大津波は来ない

「津波対策については、万全とは言えない。大津波が来てしまったら仕方ない、それぞれが命を守るしかない。私たちが日々津波対策について考えている。是非、みんなも小田原市を守って行くためにできること、もっとこうしたらいいのでは、ということを考えて欲しい。」

津波対策について考えよう

なかなか思いつかないな…

森の長城プロジェクトについて  
もっと詳しく調べよう

- ・その地域に合った木を調べてくれるんだって。主にはどんぐりみたいだよ。
- ・メンテナンスは3年間は必要らしい。
- ・ボランティアには参加できるけど、主に震災があった地域の活動みたいだよ
- ・苗木は500円かかるんだ。
- ・1年に約1m生長するんだって。
- ・活動の写真や動画を見ると楽しそう。
- ・海沿いでなくても、守りたいものの周りに植樹する方法もあるって。
- ・森だから、津波対策以外にもメリットがある。

総合の時間に、学習問題に対して、自分の意見がより説得力を持つように、教科書以外のことを調べる時間を確保する。  
もしくは、教師から資料を取捨選択し提示する。

今後の総合の活動に  
生かして行こう！

- ・小田原城や家の近くで植林できる場所を探して、この活動をやりたいな。
- ・市の対策について考えて来たから、次は自分たちが具体的にできることを調べていきたい。
- ・備蓄品とか、非常食、応急処置とかも勉強したいな。

国語の教科書に、津波対策について書かれた文が載っているよ。

資料「本物の森で未来を守る」を読んでみよう

筆者は何を伝えたいのかな…

- ・「本物の森」が現在ほとんど存在しないという問題を伝えたいんじゃない。
- ・「本物の森」が災害防止に役立つから、この活動をやったことじゃない。
- ・様々な防災対策があったけど「森の防波堤」が一番強いって言いたいんじゃないかな。
- ・最後の文が主張じゃないかな。
- 「人の命を守るため、未来を守るため、もう一度日本に昔からあった本物の森を再生していかなければならない」と書いてある。それを伝えたいんじゃないかな。
- ・森を使った、津波対策か…初めて知ったね。強そうだね！

もっと詳しく知りたいな！

内容の読み取り  
森と木について整理  
本物の森の特徴  
本物の森の強さを証明する事例の確認等

語句の確認  
説明文の文章構成の確認

「本物の森」に関心をもち、その強さや有用性を説明する文章を読み進めることができる。

小田原ではこのプロジェクトは生かせる？生かせない？本時

「生かせる」「生かしたい」

- ・P8L15「その根が、土地をしっかりと〜」津波が来ても、町や人を守ってくれるよ。
- ・P9L3「火にも強い〜」津波対策以外の効果もあるから、やった方がいいよ。
- ・P9L5「例えば〜」やP9L12「東日本大震災の〜」例が沢山ある、強さが証明されているよ。
- ・P10L2「本物の森が0.06%〜」小田原はビルばかりだから、生かせるよ。
- ・P10L7「発達した科学技術〜」科学技術には限界があるから、自然を生かしたい。
- ・P10L13「小樹林が生き残って〜」こんなに強いなら、生かしていった方がいいよ。
- ・P10L14「科学技術だけにたよらない〜」小田原は科学技術ばかりだから、これは生かせるよ。
- ・P12L6「特別な管理の必要はなく〜」楽で対策もできるんだから、生かさないともったいない。
- ・P12L11「波が突進するエネルギーを〜」生かした方が安全だよ。
- ・P13L3「この先何千年も〜」永久的に小田原を守って行けるよ。生かすしかないよね。
- ・P13L7「再生していかなければ〜」筆書もこう言っているよ。

「生かせない」

- ・P7L6「邪魔になり、切り開かれた〜」やP10L2「本物の森が0.06%〜」小田原を見ると、やる場所がない。
- ・P8L12「鎮守の森を残して、生活を守ろうと〜」小田原市民は知らない。
- ・P11L4「震災で発生した〜」瓦礫を持ってくるだけでお金がかかるよ。
- ・P11L6「海岸沿い 30m の奥行きで〜」そんな場所はないよ。海岸見にいったよね。
- ・P12L7「15 から 20 年〜」そんなに待ってられないよね。もういつ来てもおかしくないんだよ。

「生かしたいけど生かせない。」

- ・P10L14「科学技術だけにたよらない、自然の持つ強さを生かした防災対策ということに改めて注目すべき〜」今の小田原の現状を見ると、どうもこのプロジェクトはできなそう…。でもやれる範囲ならやった方がいい。科学と自然の両方で津波対策していきたい。

教科書や、集めた資料、知った具体例などから自分の考えを深め、根拠を持った意見を交流できる。

意見交流を通し、このプロジェクトのメリットとデメリットを理解した上で、小田原の現状と照らし合わせながら、よりよい津波対策について考えを深めていくことができる。

科学と自然の両方で対策する視点に注目させる。

今の自分の考えを意見文にしよう。

「小田原市の津波対策について 本物の森で未来を守るを読み終えて」

- ・プロジェクトの内容は、津波対策にとっても有効である。例えば○○。しかし、今の小田原市の現状を見ると難しい。なぜなら○○。
- 科学技術と自然の両方での対策が必要だと考える。
- 守りたい場所の近くに、植林ができるなら、していきたい。
- 自然を守っていくことも大切だということを広げたい。
- やれることは、なんでも挑戦してみたい。 など

意見文の書き方  
論理的な文賞を書くために必要な文章の構成と機能を学ぶ  
「具体と抽象」「事実と意見」「接続語」「問いと答え」「比喩」など

小田原市の津波対策についての自分の考えを、立場や理由を明らかにしながら、文章全体の構成を考え、意見文を書くことができる。

6. 本時について

(1) 本時目標 資料の文章、調べた事実、体験談等を根拠に自分の考えを持ち、お互いの考えを交流し、より考えを深めることができる。

(2) 本時展開

学習活動	主な支援・留意点【評価】
<p>一、今日の振り返り</p> <p>生かせる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・盛り土が少なくてもなんとかなる↓これなら、海の近くでも森を造れると思う。</li> <li>・ガレキと土を使って↓お金がかからない。今の小田原の防波堤は低いから造るべき。</li> <li>・小さい森でもたくさんの方の命を守れる↓ポット一つ千円だけど、守ってくれる。</li> </ul> <p>森の防波堤</p> <p>屋敷林</p> <p>生かさない</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・沿岸三百から四百キロメートルにも連なる↓海岸沿いを歩いたけどそんなことができる場所がない。</li> <li>・先の震災で発生したガレキと↓ガレキが小田原にはない。被災地から持ってくるのには、費用も時間もかかる。</li> <li>・三十メートルのおくゆきで↓西湘バイパスがある。壊すことはできないから造れない。家がたくさんある。</li> </ul> <p>森の長城</p> <p>生かしたいけど</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・十五から二十年もすると↓防波堤はいいと思うけど、できるまでに時間がかかるからそれまでの対策もしなくてはいけない。</li> </ul> <p>生かしたい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小田原は自然を生かした津波対策はしていない。↓科学技術だけに頼らず、自然の力にも頼った方がいい。</li> <li>・小田原の海岸沿いは、西湘バイパスとテトラポットぐらいいしか津波対策がされていない。他の対策をしないとまずい。</li> </ul> <p>可能な限り森を利用した津波対策をしたい。</p>	<p>一、小田原でこの活動が生かせるかどうか 話し合う</p> <p>主な支援・留意点【評価】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多数派の考えから取り上げる。子どもたち同士で指名し、「生かさない」という考えを明確にしていく。その他の少数の考えは、ノートにコメント等を書いておき、自信を持たせ自分の考えが言いづらくならないようにする。</li> <li>・根拠がない考えは、教師が聞き返し補足させたり、探させたりする。</li> <li>・「ガレキを使うこと」に対して費用面の視点は自分たちで話し合っても分からないことなので、教師が入り「費用は分からないから、知るにはどうしようか。」と投げかけ「それを知るには調べる時間が必要だ」と気付かせ、次の話題に移るようにする。</li> <li>・「生かさない」と言っている子どもは「森の長城を造る活動」についての考え「生かせる」と言っている子どもは「森の防波堤を造る活動」や「屋敷林を造る活動」についての考えであることに気付かせる。そのために、教師が両方の考えが出たときに、「これは森の長城造りの話だね、こっちは。」などと聞く。また、イラストを提示し、全体が意味を理解できるようにする。</li> <li>・交流を通して、命を守るための対策はどんな小さいことでも行っていこうと前向きに考え、次の自分たちの総合的活動に向けて意欲を高めていくことができるようにしたい。そのためにも「科学技術だけに頼らない」や「可能な限り活動をする」などの意見を大切に取り扱っていきたい。</li> </ul> <p>お互いの考えを交流し、より考えを深めることができる。【話す・聞く】</p>

7. 実践を終えて

(1) 本時にいたるまでの過程

防災対策課の方から「津波対策について一緒に考えていってほしい。」と投げかけられた児童たちは、自分たちの力で対策を考えた。「テトラポットをもっと沢山」や「防波堤をつくる」中には「海に完全にいけなくてもよいから大きな壁を作ってしまう」、「海を埋め立てる」など非現実的な考えまで話し合いの中で出てしまった。何かよい考えはないかと躍起になる児童もおり、家の人に聞いたり、インターネットで調べたりしていた。

しかし、なかなか対策を見つけることができず、クラス全体に諦め気味の雰囲気漂った。そんな時、国語の学習でこの「本物の森で未来を守る」という資料に出会った。教師がこの資料を読んで聞かせたところ「これって!」「先生!これは、津波対策だよ!」「すごい!」と声があがった。

自然を使って津波対策ができるという考えは、今まで全くなかった子どもたちにとって衝撃的であった。そして「落葉樹林ってなに。」「屋敷林とか、森の長城ってどういう意味かよくわからなかった。」などという疑問が多く出た。他にも「この活動について調べてみたい。」「本当に森で対策なんてできるの、怪しい。」「はやく、防災対策課の人に伝えなくちゃ！」などの話が出た。

クラスで「防災対策課の人にはやく言いたい」という考えが出たが、教師から「本当に内容の理解はできているの？分からないのに紹介なんてしていいの？」と投げかたところ、自分たちでこの資料を深く読み取り、さらにインターネットなどで、情報を集め、自分たちが内容を理解した上で伝えようということになった。

子どもたちが初発の感想に書き表した疑問と関連させながら、森と木について違いや本物の森の特徴、語句の確認、説明文の文章構成の確認、森の強さを証明する事例の確認等を十分に行った。資料に出てくる事柄については、実物の写真や、動画なども見せイメージを共通理解した。

そんな中、「本当に生かせるのか、無理な気がしてきた…」という思いが児童の中で多数をしめるようになってきた。そこで「小田原でこのプロジェクトは生かせる？生かせない？」と投げかけた。児童は思い思いに今まで調べてきたことを元に自分の考えをノートに書き出した。書くことが苦手な児童に対しては声をかけながら、一緒に考え、書いていった。

## (2)本時での様子

ノートに自分の考えがしっかりと書かれていたこと、教師からのコメントも書かれていたため、どの児童も安心して自分の考えを発言することができた。互いの考えを聞き合い「分かるよ。」と声をかけたり「なるほどね。」と考えを認め合う姿が多く見られたりし、とても温かい雰囲気であった。言葉だけでは自分の考えが伝わらないと考えた児童の何人かは、黒板に絵をかいて「ここまで分かる。」と聞きながら説明をしていた。

生かせるかどうかの話し合いでは、「木を育てたら、日光が当たらないところもあって文句が出るよ。」「国道一号線周辺に木なんて植えられる場所がない。」など、より具体的な考えの交流がなされた。また、「防波堤代わりのバイパスに更に木を植えて、強化する」という考えには、イメージの食い違いが生まれ、「そんなことできない。」「そうになっている場所があるからできる。」などという白熱した考えの交流がなされた。教師もその中に入って言葉を付け加えたが、結局はどのような取り組みなのかイメージできず、もやもやした状態で振り返りの時間を迎えることとなった。

## (3)単元を通しての成果と課題

### (成果)

- ・総合的な学習の時間で活動していた「小田原の防災」とつなげることで、意欲的に説明文の読み取りに取り組むことができた。普段国語の学習は苦手だと考えている児童が多い中、自主学习で意味調べをしてきたり、音読をしてきたりする児童もおり関心の高さがうかがえた。主体的に学習する楽しさを感じることができたと考ええる。
- ・自分の考えを分かりやすく伝えるためには、根拠がなくはいけない、話の要点をおさえないといけない、図や表など補助資料があればなおよい、実際の体験談のもと、考えを伝えるとよい、などの話すスキルの向上に意識が生まれた。自分の考えを伝えたいのになかなか意思疎通ができない場があり、歯がゆさを感じた児童が、本時後に写真を見せながらもう一度説明したり、友だちに伝える文章を書き直したりしていた。それを聞いた児童らは、「そういう意味だったのか。」と納得していた。説明の仕方の何が変わり、説明が分かりやすくなったのか確認させたことで、クラス全体に伝え方に対する意識が高まり、その後の学習にも生かされていた。

### (課題)

- ・「この」や「その」などの指示語が多く飛び交うと、児童同士の捉えにズレが生じてくるのが分かった。特に学習問題である「この活動」の「この」が共通理解されていなかったため、児童同士で話している話題が「森の長城」なのか「屋敷林」なのか「森の防波堤」なのかあやふやであった。そのため、理解に時間がかかったり、話し合いに食い違いが生じたりした。指示語の確認と、「何について今話し合っているのか」の確認が重要であり、今後注意していこうと思う。
- ・教師の出所として、一方の考えばかりが出ているとき、もう一方の考え方の児童を意図的に指名するなどしていきたい。補足が必要な考えが出たとき、教師が「こういうことだよ。」と付け加えるのではなく、「何かこの考えについて言いたい人はいる？」などと言いつ返しことにより、児童から「こういう意味でしょ。」「その考え方、違うような気がする。」など、児童同士で補足し合って理解していくことができる。子どもたち同士の考えで授業が進んでいくように、教師の出所を見極めていきたい。

